

史遊会通信

No.243号
平成27年
6月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

五月講演要旨

遙かなる河西回廊の旅

中込 勝則

中国の歴史は、ある一面では異民族との闘争の歴史であった。中国本土の歴代王朝が、北あるいは北西からの圧力をいかに防いだか、または王朝の国力が充実して外に向かい、如何に周辺諸国をきり従えて領土を拡張したかの攻防の歴史である。

まず、戦国から秦の時代は、北から匈奴の本土への侵入をいかに防ぐかであった。本土北辺の秦・趙・燕などは、毎年秋になると匈奴がやってきて、穀物や家畜を略奪した。それを防ぐために彼らの馬がとびこえられない程度の長城を築いた。

秦の始皇帝は全国を統一後に、それらの長城を繋いで万里の長城を築き、將軍蒙恬は匈奴を討ち破って莫北に追った。しかし、匈奴に大打撃を与えて息の根を止めたわけではなかったから、前漢になっても侵入は止まず、

前漢の高祖は、オルドスに侵入した匈奴を討つため自ら出陣したが、逆に匈奴にかこまれて捕虜になりそうになり、単于の妻に貢物を贈ってとりなしを頼み、命からがら逃げかえった。これに懲りてその後歴代皇帝は、ひたすら対匈奴和親政策に徹し、公主を嫁がせたり、貢物を贈った。

例会のお知らせ

◎ 六月例会

日時 平成二十七年六月二十四日(水)
午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 三戸岡道夫氏

テーマ 歴史の裏話し(真相?)

秀吉はなぜ関白になったのか?

千利休はなぜ切腹したのか?

家康はなぜ江戸に幕府を開いたのか?

等々

七月号自由執筆 瀧沢中、宇野正雄、

高橋正彦の諸氏 締切六月末

◎ 七月例会

日時 平成二十七年七月二十二日(水)
午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 前田速夫氏 (外部講師)

テーマ 白山信仰について

九月号自由執筆 太田精一、森下征二、

佐藤健一の諸氏 締切八月末

やがて、第六代武帝が即位し、充実にしてきた国力を背景に、匈奴を徹底的に叩こうとした。まず、匈奴に追われて中央アジアに移っていた大月氏国と組んで、匈奴を夾撃しようと張騫を同国に派遣した。しかし、張騫は匈奴に掴まって、消息が途絶えしまった。

武帝は、衛青・霍去病という若い將軍を得て、彼らの活躍により、匈奴をたたいて北に追い払った。一方、張騫は拘束された後、匈奴の妻も与えられて子もなして十年間が過ぎたが、隙を見て逃げ出して大月氏国に達し武帝の意をつたえた。しかしかれらにはその意思はなく、出発から十三年後にむなく漢に帰還した。武帝の狙いは実らなかったが、張騫はそれまでほとんど知られていなかった西域の情報をもたらし、ゆたかな物産や優秀な馬（＝汗血馬）を産する国があることが分かった。武帝は、匈奴の騎馬に対抗するには、「汗血馬」を得たいと、將軍李広利を中央アジアのフェルガナに派遣した。第一次遠征は失敗。第二次遠征でやっと、大宛国を降伏させて、汗血馬三千頭をつれかえった。霍去病は、祁連山付近で匈奴の右翼を叩き大勝利した。漢は河西回廊地帯に敦煌・酒泉・武威・

張掖の四郡を置いて本土から移民して匈奴に備え、漢の勢力は西域に伸長した。葡萄・クローバー・ハミ瓜・胡麻などそれまで本土にはなかった産物がもたらされたのもこの時代であった。（河西とは黄河の西の意）

後漢時代には、將軍班超が大いに西域を平定し、勢威を張った。中央アジアでは大月氏国が北インドまで勢力を伸ばし、クシヤナ朝を建て、カニシュカ王が出て仏教が興隆し、仏教が中国に伝播したのもこの時代である。

後漢が亡びて、三国時代や晋時代、それに続く五胡十六国時代には、中国の北方は周辺民族が進入して小王朝の乱立興亡がつづき、西域にまで手を伸ばす勢いは衰えたが、その中でも北魏は西域にも手をつけ、敦煌石窟の造営などが始まって、北魏時代の遺跡も多く残っている。

クチャに生れた鳩摩羅什は、この乱世の中を、武威に勾留されたり苦勞して河西回廊をたどって洛陽にたどりつき、数々の仏典を漢訳し、正しい仏教を中国に伝えた。

やがて、隋が本土を統一する。つづく唐は強力な政権で、西域に大いに勢力を伸張した。このころ、北方には突厥が大帝国を建て、唐

と対立した。漢と匈奴との戦いが異民族との横綱大関戦第一幕と譬えれば、第二幕は、唐と突厥戦だ。唐は彼らを防ぐため、北辺に六都護府をおいて備えた。

玄奘三蔵が国禁を侵して、インドに行ったのは、唐の太宗の時代だった。河西回廊を西に向かって死ぬおもいで沙漠を越え、トルファンにあつた高昌国の国王麴文泰や西突厥可汗の援助を得て、インドに達し、十六年間の修業を終えて唐にかえり、その後の仏教興隆に貢献した。

玄宗の時代に起つた安史の乱は、八年間に及ぶ大乱で、空前の繁栄を謳歌していた唐に壊滅的打撃を与えた。唐はその後百年間続くが、夕陽が西に沈むように耀きを失って行く。乱の鎮圧にウイグル族やチベット族の力を借りたために、唐は彼らの侮りを受け、しばしば本土に乱入され、この撃退にも力を割かねばならなかった。

九世紀半ばにはウイグル族は内部から崩壊し、チベット族も内部の勢力争いから勢いが弱まった。この隙に、敦煌では在地漢人張義潮がチベット族を追い払って、「帰義軍政権」を樹立し、唐に帰順した。

十世紀に入ると、北方に契丹族が「遼」を建国し、十一世紀には銀川あたりに、タングート人の李元昊が「西夏」を建てた。本土の宋は彼らの圧力を受け続け、ついに南に移って、杭州に南宋を建てた。十二世紀には、北方では「金」が建って、「遼」を亡ぼした。

「西夏」は、南に手を伸ばして河西回廊を平定した。敦煌の「帰義軍政権」も例外ではなく、西夏が攻めてくる混乱の中、莫高窟の第十七窟に膨大な経典や仏教関係の文書・絵画などが隠されたのもこのころのことだった。やがて、東からもつと物凄いのがやってきた。ジンギスカンのモンゴルである。本土では「金」や「宋」が、西域では「西夏」が亡ぼされ、さらに西のサマルカンドでは、「ホラズム国」が滅亡し、サマルカンドやブハラは徹底的に破壊しつくされた。モンゴルの勢いはロシアやヨーロッパの一部まで征服して、空前の一大帝国が出現した。中国本土は元に、西域以西はオゴデイ汗国・チャガタイ汗国・キプチャック汗国・イル汗国の四つに分割統治された。今の新疆地区はチャガタイ汗国の領土となった。

四つの汗国は次第に勢威がおとろえ、やがてチャガタイ汗国を亡ぼしてその姫を娶ったチムールがジンギスカンの後裔と称してサマルカンドに「チムール帝国」を建てた。モンゴルに破壊されたサマルカンドを建て直し、今に見る壮麗な建築群を復活した。そのころ、本土では百年つづいた元が、明に追われて北方に追い払われた。ジンギスカンの後裔を名乗るチムールはモンゴルの仇討をしようと明に向けて大軍を發した。時の明の皇帝は永樂帝だった。この戦いが行われれば、異民族との横綱大関戦第三幕の大取組となったはずだが、老齡のチムールは東征の途中に風邪をこじらせて死んだため、実現しなかった。

その後世界的に大航海時代が始まり、シルクロードは次第にその意義が薄れ、河西から新疆地区は忘れ去られて、三百年眠ったようになつてしまった。ふたたび脚光を浴びるのは、十九世紀に、ロシアの南下やイギリスのインドから北への触手がはじまり、西欧を中心とした探検隊が中国奥地に派遣されるようになってからである。彼らが見たのは仏教を中心とする歴史的なすばらしい文物だった。とりわけ敦煌の発見は一大センセーショナル

を巻き起こし、莫高窟に残されていた絵画・仏典に彼ら目を見張り、競うように自国に持ち去った。莫高窟にあった文物五万点のうち四万点が国外に流失した。敦煌文書文物は、第十六窟に住みついていていた王圓籙という道教の坊主によつて偶然に発見された。

彼は第十六窟に耳房（現在は第十七窟という）があることみつけ、そこにあったおびただしい文物を見て、役人に届け北京にも報告されたのだが、義和団事件の最中だった政府は、それどころでなく、「現地で、良きにはからえ」という態度だった。西欧探検隊らは、その価値が判らない王圓籙から、だますようにしてただ同然で買いとつて、本国に送ったのである。やがてその価値に気づいた清朝政府は、国外持ち出しを禁じたが既に遅く、国内に残ったのは約一万点といわれる。

かく長い歴史の中で、民族や王朝の興亡が繰り返された西域は、現代の我々の限りないロマンをかきたててやまない。

今回の我々の旅はこの河西回廊を敦煌から西安まで東に向かって旅しようとするものだった。わたしが、シルクロードを訪れたのは、今回で三回目であった。

第一回目は、平成十四年六月、西安↓ウルムチ↓トルファン↓敦煌↓蘭州↓西安。一番ポピュラーなコース。

第二回目は平成二十三年、ウルムチ↓クチャ↓タクラマカン砂漠横断↓ニヤ↓ホータン↓ヤルカンド↓カシユガル↓ウルムチ↓トルファン↓敦煌↓西安。一番奥地のコースだ。今回は西安↓敦煌↓安西↓酒泉↓張掖↓武威↓蘭州↓西安。これでいわゆる「シルクロード」といわれる地域はほぼ踏破したことになる。

前は、史遊会の森下・村上諸氏、同級生の野川君とわたしの計四人、今回は森下・村上・松木の諸氏とわたしの四人が旅行社のツアーに参加し行った。最初に行ったときも、メンバーは異なるが四人だった。たまたま偶然の一致である。それにしても、行くたびに感じるのは、街が色々と変わってきていることだ。空港は建て替えられたり拡張され、街は古い建物が壊されて新築物が増えてきれいになり、トイレも衛生的になった。観光地は公園のように整備されている。現在、中国は大都市ほど建設の槌音が響き、人々が忙しく動き回っている。いま、中国経済の減速が言

われ、いずれバブルがはじけるといふ人もいるが、一時的にそういうことはあっても、インフラは圧倒的に遅れており、人々の生活上への意欲は極めて高い。この勢いは長期的に続くであろう。

今回の旅で見えてきたところを色々と紹介したいが、『史遊会通信』のスペースでは一回にとっても書ききれぬものではないので、次号以降で追々と記していくこととしたい。

(本稿で、まず最初に西域の歴史を記したのは、二千数百年の歴史的文物を、見学した順序に書きつづるのでは、いつの時代のことなのか混然となってしまうのを懼れたためである)。

(つづく)

六月講演要旨

歴史の裏話し(真相?)

三戸岡道夫

秀吉はなぜ関白になったのか?

千利休はなぜ切腹したのか?

家康はなぜ江戸に幕府を開いたのか?

等々

自由執筆

中将姫伝説と水銀

柴田弘武

中将姫伝説については皆様よくご存じのことと思いますが、とりあえず「ウィキペディア」でそのあらましを紹介します。

「藤原鎌足の曾孫、右大臣藤原豊成とその妻の紫の前（品沢親王の娘）の間には長い間子どもが出来ず桜井の長谷寺の観音に祈願し、中将姫を授かる。しかし、母親は、その娘が五歳の時に世を去り、七歳の時に豊成は、橘諸房の娘である照夜の前を後妻とする。

中将姫は、美貌と才能に恵まれ、九歳の時には孝謙天皇に召し出され、百官の前で琴を演奏し、賞賛を受ける。しかし、継母である照夜の前に憎まれるようになり、盗みの疑いをかけられての折檻などの虐待を受けるようになる。

一三歳の時に、三位中将の位を持つ内侍となる。

一四歳の時、豊成が諸国巡視の旅に出かけると、照夜の前は、今度は家臣（引用者註 松

井嘉藤太といわれる）に中将姫の殺害を命じる、しかし、命乞いをせず、極楽浄土へ召されることをのみ祈り読経を続ける中将姫を家臣は殺める事が出来ず、雲雀山の青蓮寺（宇陀市）へと隠す。翌年、豊成が見つめて連れ戻す。中将姫は一〇〇〇巻の写経を成す。

天平宝字七年（七六三）、一六歳の時、淳仁天皇より、後宮へ入るように望まれるが、これを辞す。その後、二上山の山麓にある当麻寺へ入り尼となり、法如という戒名を授かる。

二六歳で長谷観音のお告げにより、当麻曼陀羅を織り上げる。仏行に励んで、徳によって仏の助力を得て、一夜で蓮糸で当麻曼陀羅（観無量寿経の曼陀羅）を織ったとされる。

宝龜六年（七七五年）春、二九歳で入滅。阿弥陀如来を始めとする二十五菩薩が来迎され、生きたまま西方極楽浄土へ向かったとされる」というものです。

さてここでは雲雀山（日張山）は奈良県宇陀市の山とされていますが、和歌山県橋本市恋野と同有田市糸我町中番にあるそれぞれの雲雀山も、当地こそ中将姫が隠れたその山であると主張しているのです。

私は全国の別所を調べていて、当麻寺のある当麻町（現葛城市）に別所があるほか、上記の三ヶ所にも近辺に別所があり、そこを訪ねることでそのことがわかった次第です。そこで中将姫伝説のある四ヶ所に共通するものは何かと探すことにしました。

この伝説の最有力候補は上記のように宇陀市宇賀志（元奈良県宇陀郡菟田野町宇賀志）です。神武紀（記も同じ）に出てくる兄猾（えうかし）、弟猾（おとうかし）の本拠地です。兄猾はここで自らが仕掛けたわなに嵌まって死に、「その時に流れた血がくるぶしを埋めるほどに溢れた。そこでその地を宇陀の血原という」とある所で、今も血原橋の名が残ります。そこから芳野川の支流である宇賀志川を遡っていくと静寂な森のなかに瀟洒なお寺が見えてきます。それが日張山青蓮寺でした。私が案内を乞うと尼さんが出て来て、説明をしてくれました。私はその時始めてここが尼寺であることを知り、その清楚な佇まいに納得したことを覚えていました。

青蓮寺の伝承では中将姫は最後に再びこの地に戻り、一字の堂を建て、自らの彫像と嘉

藤太の像を祀ったとされます。今もその像が残されています。

「なかなか山の奥こそ住みよけれ 草木は人のさがを言わねば」という中将姫の歌碑があります。

橋本市恋野町は紀ノ川南岸で、紀ノ川に注ぐ東の川と去年(ご)川に挟まれた所です。ここに「中将ヶ森」「中将倉」「糸の懸け橋」などの旧跡が残っています。寺は雲雀山福王寺です。

当地は明治二二年の町村合併の時、県が「恋野村」とせよと指示したことに對し、合併十ヶ村は「当地方ニ因縁有之孝謙天皇・大炊帝両朝ノ右大臣藤原豊成公女中将姫ノ旧跡ニ拠り、我々拾ヶ村ヲ以テ村名ヲ中将村ト議決シ、其旨郡長へ答申仕り置候(以下略)」と再三の上申を行っています。答申は実現しませんでした。以て地元の中将姫伝説に對する熱い思いが伝わってきます。

有田市の糸我町は有田川の南岸で、古来熊野参詣道が通っていて、糸我峠は歌枕にもなっていました。この地の得生寺は雲雀山と号し、中将姫の父豊成の忠臣春時の草庵の跡と

いい、境内に中将法如堂があり、境外雲雀山に奥院廟所があるといっています。

『大日本地名辞書』(以下『地名辞書』と略す)も「当麻寺縁起と当寺の伝とに因るに、当寺は中将姫の屏居の地ぞといふも古き伝へならんかし」と書いています。

さてこの三ヶ所の中将姫伝説地を地図上に落としてみると見事に中央構造線にあることに気がつきます。いうまでも無くこの構造線は三重県伊勢から紀伊半島の中央部を横断して、四国・九州を東西に貫く線で、「空海の密教山相ライン」(本城清一)とも言われ、水銀鉱床であることは有名です。

それではその三ヶ所と水銀の関係を見てみたいと思います。

まず『菟田野町史』によれば宇陀市菟田野町大沢には本邦最大規模の大和水銀鉱山があり、「大和式鉱床区内の唯一の稼行鉱山である」と書かれています(現在は操業停止)。なお同書によれば「大和水銀鉱山は、坑内の遺品類よりみてすでに一二〇〇〜一三〇〇年以前に開坑されていたと考えられている」とあります。

また同町駒帰(こまがえり)にも神生水銀鉱山がありました。『地名辞書』に「辰砂水銀の鉱産あり」と書かれています。

また同町入谷(にゅうたに)には丹生神社があります。この丹生は水銀を指します。入谷ももとは丹生谷と書いたそうです(松田壽男著『古代の朱』)。古市場や上芳野には水分神社があります。田中八郎氏の『大和誕生と水銀』によれば、大和の水分神社は意図的に丹生神社から変えられたものだそうです。

神武紀(記)にある「血原」についても松田壽男は前著で、「(水銀含有の)の母岩がまつ赤に野を染めて露頭していたので、これを血原とよんでいたであろう」と述べています。

橋本市恋野の場合はどうでしょうか。ここは直接的に水銀との関係を偲ばせるものはないのですが、少し広く周囲を探すと、橋本市の南は高野町筒香(つつか)です。ここに丹生神社があり、松田壽男は「古代の朱産地であったことは確実であり、高野山の下で紀の川に入る丹生川の発源地帯だ」と述べています。またその北には富貴(ふき)の集落があります。ここにも丹生神社があります。丹生川は橋本市

西端をかすめながら九度山町を北流して紀ノ川に注ぎます。その川口が入郷（にゅうごう）昔は丹生郷と書かれた）で、松田壽男は「こは丹生氏の本拠であつて、丹生神社が存在したことは疑いをいれない。今日でもこの地方一帯には高品位の朱砂が点々と存在しているように、丹生氏はここを中心として、丹生川すじはいうまでもなく、遠く高野山や天野にかけて散居し採鉱していたのである。ところが丹生郷の丹生神社は、金剛峯寺が落成した弘仁時代ののち、高野政所とさえいわれた慈尊院の奥に移され、しかも現在ではニウズヒメ祭祀を主体として十九柱の神を祀り、神様オンパレードと化して丹生官省符神社と呼ばれる」と書いています。

橋本市の東は奈良県五條市ですが、こちらも丹生川が北流し吉野川（紀ノ川）に注いでいます。

その川口近くが丹原町で、丹生川神社があります。いわば橋本市は東西の丹生川に挟まれた地域であり、松田壽男説をとれば丹生氏が散居していた地域とみてよいのではないのでしょうか。

次に有田市糸我町を見てみましょう。ここも直接的には水銀との関係を見出せませんが、東接する有田川町（もと吉備町）に東丹生図、西丹生図の地名があり、松田壽男は「有田ミカンのうちでももっとも甘いので名高い丹生ミカンの産地だが、むかしは朱砂の産地として丹生氏が遷り住む」と書いています。なおここにあつた丹生神社は次に述べる白岩神社に合祀されてしまったと言います。

ちなみに沢史生氏は「水銀鉱床地帯の辰砂土壌そのものに毒性はない。その地に栽培された野菜や果実が、人体に無害なのはそれゆえである。そればかりか辰砂土壌に産出する果実は、とりわけ美味であることが名だたる果実産地からも考えられる」（『鬼の大事典』）と書いています。有田市の雲雀山山麓はミカン畑でした。

吉備町の鳥井戸には田殿丹生神社があります。更にその東の金屋町生石に丹生の字があり、中野には白岩丹生神社があります。

有田市糸我町の西に千田（ちだ）という地名がありますが、宇陀市の血原に倣えば「血田」の転訛かもしれませぬ。

こうしてみるとこの地もやはり水銀と関係あるとみてよいように思うのです。

ところでもう一ヶ所の中將姫伝説地である葛城市の旧当麻町はどういう所でしょうか。ここは中央構造線の中には入らないようなので、水銀とは関係なさそうに思えるのですが、当麻寺の南東一・五キロほどの長尾という所に、式内社である長尾神社があります。祭神は水光姫命（みひかひめのみこと）です。水光姫とは何者なのでしょう。神武紀に天皇が宇陀から吉野に至ると光る井戸の中から尾のある人が出て来た。何者かと問うと「臣は国神で名前を井光（いひか）という」と答えます。そして彼は吉野首部（おびと）の始祖であると注釈されています。

松田壽男はこれを朱砂を採取する豎坑から出て来た人の形容であるとす。なぜなら「丹井すなわち朱砂坑は、その壁面に自然水銀を汗のように吹きだしている。気温や地熱の関係などで、それがはなはだしい場合も珍しくない。その自然水銀は豎坑の底部にたまる。それはまさに光のある井戸ではないか」という訳なのです。見事な解釈と思われませぬ。水光姫も井光の一員だったとみて間違いないと

思います。水銀のことを「水がね」ともいいます。水光姫は「水がね姫」でもあったのでしょうか。

かくて當麻町の長尾神社も含めて、中将姫伝説地は四ヶ所とも水銀と関係あることが浮かび上がってきました。

では中将姫がなぜ水銀とかかわるのでしょうか。ヒントがありました。

言葉遊びに、「大将の夫人が飲んでも中将湯とはいかに？ 継母が飲んでも実母散というが如し」というのがあります。

この中将湯というのは女性薬としてツムラ順天堂が明治三十年代に作ったものだそうです。「ウイキペディア」によるとその「創業者津村重舎は大和宇陀郡出身で、雲雀山青蓮寺の檀家であり、母の実家の藤村家に、逃亡中の中将姫をかくまった御札に製法を教えられた薬（中将湯）が、代々伝えられていたという」とあります。

「ツムラの会社案内 歴史」にも「中将姫が家を出て最初に身を寄せたのが、初代津村重舎の母方の実家・藤村家といわれ、それを契機に交流が始まりました。中将姫は當麻寺で修行していた頃、薬草の知識も学び庶民に

施していましたが、その処方藤村家にも伝え、それが藤村家伝の薬・中将湯となったということですが」とも書かれています。

小路田泰直氏の『邪馬台国と「鉄の道」』には、当麻寺の「中之坊がつい最近まで陀羅尼助を生産していたように、修験道ともつながりの深い寺だ」とあります。陀羅尼助とは役の行者が大峰山で開発したという胃腸薬だそうです。当麻寺と薬草が結びついてきます。宇陀市も古来から薬草で有名です。旧大宇陀町には森野薬草園が現在も営業しています。

水銀土壌と薬草が関係するのでしょうか。ともあれこの話によると中将姫は薬学の知識があつたことになります。「ウイキペディア」には「中将姫が婦人病に悩まされたとの伝説があり」ともあります。

水銀の薬効は昔からよく知られていました。私なども子どもの頃切り傷をつけたら必ず赤チンを塗ったものです。今は禁止されていますが…。そのほか毛しらみ駆除剤、駆梅薬剤、墮胎用剤などに使用されました（詳しくは田中八郎著『大和誕生と水銀』参照）。

同書に「伊勢おしろいを軽粉と書いて『はらや』と読みまマ。（中略）『はらや』と発源す

る語源は、墮胎用剤として利用された領域で生まれたようだす。墮胎が必要となる状況は、不適切な性関係の後始末の例が多いただけでなく、権力や資産や名譽の継承に絡む場合がほとんどですわ。つまり権力・富裕層の屋敷内世界では、墮胎がしばしば登場し重大問題として処置されたんだ。もう一つ、遊郭内で活用されとりまマ。（中略）医者ではない墮胎処置人の名称を、或いは手術に用いる薬剤を『はらや』と呼ぶ隠語から起こつたとみられまマ。」とあります。

なお近世「中条流は産婦人科の代名詞として標榜され、ひいては一般に墮胎手術を行う者を中条流と称するようになった」（『国史大事典』）とありますが、この「中条流」は「中将姫」とは関係なさそうです。

ともあれこのような水銀の薬効とその製法の秘密を伝授されたのが津村順天堂だったのでしよう。中将湯のお蔭で中将姫伝説の謎が少し見えてきたように思えるのです。

ただし共通項としてのヒバリ山についてはまだわかりません。

自由執筆

故郷の空

千坂 精一

NHKの朝ドラ『まっさん』のなかで、ヒロインが然り気なくハミングしているのを聴いて、

(あれ、あの唄じゃないのか)

そう思った途端、七十年あまりも昔のことが鮮やかに蘇った。

当時私は十四歳で、東京高等師範学校付属高等部の二年生であった。

祖父のたつての希望で受験し、来春豊島師範へすすみ、さらに高等師範を卒えて中学校(旧制)の教官になるはずであった。

ところが二年まえの暮れに太平洋戦争がはじまり、開戦当初はハワイ、マレー沖海戦の大戦果に湧いたものの、翌年高師付属へ入学したばかりの四月十八日に、B 25爆撃機十六機に東京をはじめ名古屋、神戸などを空襲されてしまった。

たしか放課後だったので、私たち四、五人は校舎の屋上へ駆け上がり、低空飛行するB 25を友軍機と間違え手を振ってしまった。

そのことが教練指導の陸軍配属将校に知られて非国民扱いされ、その後はなにかと言いつけられつづけては鉄拳制裁や腕立て伏せなどの罰直を食らわされた。

私たちは一、二年生それぞれが三十名足らずのひと級だけだったので、ちよつとしたことでも目立っていつまでも睨まれつづけた。

学科では国史の教官を尊敬し好感を持っていたので、選択科目にしようと考えていたのだが、戦局が思わしくなくなつてきてすぐに役立つ工業か商業を選ぶことになつてしまった。

私は手先が不器用でとても旋盤などの工作機械を取扱う自信がなかったので、商業を選んで簿記の技法を学ぶことにしたのだが、軍需産業に寄与しない簿記などを選ぶとはと、またまた配属将校に睨まれてしまった。

そのころになると近隣の家々の門柱に(出征軍人の家)と書かれた木札が貼りつけられるようになって、母子家庭のわが家は非国民のようで肩身の狭い思いをしていた。

そこで私は徴兵適齢には達していないが、陸海軍の学校へ入れば軍人には違いないと思ひ、祖父や母や叔父たちには内緒で海軍飛行学校と通信学校を志願した。

受験日の通知がきて家族にばれてしまったが、祖父や母も戦時下なのであからさまに反対はせず諦めたようだった。家族としては私にもしものことがあつても弟がいるからいいとも思つて渋々承諾したのである。

結局飛行学校のほうは肺活量、握力、視力で不適格だったが、筆記試験には合格していたので通信学校のほうへまわされた。

そのとき、口頭試問に立ち会っていた中佐の襟章をつけた試験官の責任者らしい人が、「通信学校で優秀な成績を修めれば飛行隊に配属されて偵察搭乗員になれるみちもある」そう言つて慰めてくれた。私が飛行兵にあらがれているように見えたのであろう。

年が明けても合格通知がこないので豊島師範学校への入学準備をすすめていたところ、二月下旬になつて合格通知が届き、五月二十五日防府海軍通信学校への入校が決まった。

志願にあつては陸軍を嫌つて海軍に固執したことで配属将校に地団駄踏ませ、仕返して溜飲を下げた。

高等師範には教生という制度があつて、卒業する学生が三学期に付属の中等部、高等部に教育実習にやってくるようになっていた。

そのとき担任になったIという教生が、あるとき国語の時間にスコットランド民謡に沁教授だといって小声で歌って聴かせてくれた。それを朝ドラでハミングしていたのだ。

夕空晴れて秋風吹き

月影落ちて鈴虫鳴く

おもえば遠し故郷の空

ああわが父母ちちははいかにおわす

澄みゆく水に秋萩たれ

玉なす露はすすきに満つ

おもえば似たり故郷の野辺

ああわが兄弟あなごたれと遊ぶ

唄い終わったあとでI教生は、

「君たち東京育ちにはわからないだろうが、地方出身者はこの歌を聴くと望郷の念にかられるんだよ」

そう沁々と言った。

たとえ東京育ちであっても、軍歌に明け暮れている私たちには一服の清涼剤であった。

卒業が近くなってきたある日、掃除当番を終えて学友たちとわかれ一人で高師の学生寮の横を通ったとき、偶然I教生と出会った。

誘われて部屋について行くと、山形の両親が持ってきてくれたという紅白の餅を焼いて振る舞ってくれた。

「俺が海軍に入隊するので祝いのつもりなんだろう」

私はI教生の話を聴いて、すかさず、

「予備学生ですね」

そうでしょうと念を押すと、I教生は、

「僕は指揮官になる自信がないから、横須賀海兵団に入って一兵卒になるんだよ」

海軍の話が出たついでに、私も豊島師範ではなく海軍通信学校に入ることを話すと、「そ

うか。君は学校出だからどこかで再会したら僕より上官になっているだろうな」

そう言って苦笑した。

そして、別れだからと促されて二人で『故郷の空』を唄った。

そのときのこと忘れられず、海軍の練習生になってもときどきI教生のことを思い出していた。

学校は集団生活なので独りになれるときがなかったが、食卓番のときの烹炊所との往復が数少ない息抜きのときであった。

受け取るときは飯、汁、菜と食缶が別々なので二、三人で行くが、返すときは食缶を重ねて持てるので一人のときが多かった。

その日は夕食の当番だったので、あたりは暗く人影もなかった。

手ぶらの帰りにふとI教生のことを思い出して、開放感から一緒に唄った『故郷の空』を口遊んで浮かれ歩いた。

兵舎の近くまで来たとき、背後から呼び止められて振り向くと分隊助手の張り切りボーイT上水が立っていた。その場で鉄拳制裁を受けたあと就寝まえの温習時間にふたたび兵舎裏の暗がりへ呼び出された。

T上水の手には軍人精神注入棒(バット)という胸のあたりまである太い棒が握られている。

「貴様、女々しい歌など唄いやがって、娑婆しやばつ気が抜けておらんから軍人精神を叩き込んでやる」

いつものように両手を上げて足を開き、尻を突き出して受け身の姿勢をとった。

一発受けるたびに踉蹌ける。十発もくらうとふらふらして歩行もままならない、

なにしろ越中禪に綿の事業服だけの薄着であるから、尻に皮下出血の青痣が出てその夜はとても仰向きには寝られないのだ。

I教生の消息はいまだに不明のままである。

自由執筆

「久能山東照宮」と「薩摩土手」

中島 茂

徳川家康没後四百年の今年、静岡市は大キヤンペインを展開している。

連休明けの五月九日(土)、横浜在住のT君が静岡市を訪れた。

「静岡県出身と言っても、意外に静岡市のことを知らない。」という彼の言葉で、今回は久能山東照宮・日本平・薩摩土手などを廻ることにした。

九日は曇り空だった。静岡駅南口からバスで「久能山下」に向い、そこから一一五九段の石段を昇る。と言っても、金比羅宮のような急斜面を昇るのではなく、緩やかなまわり道であり、一段一段も低い。小さな子どもでもすいすいと昇って行く。

眼下の田園風景を楽しみつつ、二十分ほどで楼門に着き、本殿・石の間・拝殿を参拝した。権現造・総漆塗・極彩色の社殿は平成二十二年国宝に指定された。この時季周囲の緑にひととき映える。

ついで社殿の裏手の道を登って、家康公神廟に参拝した。この神廟については「永遠の

謎」がある。以下は十九日付けの静岡新聞からの引用である。

家康は駿府城で死去する直前、重臣らを呼び自身の葬儀などについて遺言した。

しかし遺言の末尾にある一言の解釈が久能山東照宮と日光東照宮では全く異なり「永遠の謎」とされている。

問題の文言は「勸請」、遺言をそばで聴いた金地院崇伝は日記に「遺骸は久能山に納め、一周忌が過ぎたら日光に小さな堂を建て、そこに勸請せよ」と家康が指示したと書いている。

この解釈について、久能山側は「一般的な勸請の意味は魂を別の場所に分祀すること」。このため、家康公の遺骸は現在も久能山にある」と主張する。一方、日光側は改葬の際遺骸を納めた霊柩が運ばれたとの別の記録もあり、「遺骸は一周忌に久能山から日光に移された」とする。

遺骸がどちらにあるかは研究者の間でも見解が分かれる。……以下略

ただ「日光社参」が幕府の威信をかけた一大行事であったことを考えると、江戸時代日光東照宮のウエイトは、久能山東照宮のそれよりもずっと大きかったことは言うまでもない。

午後の目的地は薩摩土手である。静岡駅西

方の「安倍川橋」から土手の起点「妙見下」までは四キロほどである。途中の「安西橋」までタクシーに乗り、肝心の残り半分を歩くことにした。

家康が駿府で大御所政治を始めたころ、安倍川は賤機山しずはたのすぐ脇を流れていた。「暴れ安倍川」は駿府を洪水の危険にさらしていたようである。

関ヶ原の戦いの直後の一六〇六年、家康は駿府城の拡張と城下町の整備をはかり、安倍川の流路を大きく西方に移した。

高さ五・四m、基底二十一・六m上部十・八mの大堤防を賤機山しずはた南麓の「妙見下」を起点に、下流の中野新田まで四・四キロにわたって造らせたのである。

家康が薩摩藩に命じて造らせたので、「薩摩土手」の名があると云われるが、確証はない。現在は土手のほんの一部が起点の「妙見下」の近くに残っているが、それでも往時の大工事をしたのぶに十分である。

平成元年この地に有志により「薩摩土手の碑」が建てられた。

なお、現在の静岡市内の地名「安西」、「安東」はもとはそれぞれ安倍川の西・東を意味したが、いまは両地とも安倍川の東に位置している。流路の大変化を物語るものである。

(友の会)

自由執筆

相模原市に見る規制緩和

開店前につぶれるコンビニ

新井 宏

相模原に住んで、もう五十年近くになる。町村合併によって、人口八万人で市制を敷いたのが昭和二十五年。市役所は各町村とは別に、新たに相模原台地の中央部に定められた。我が家は、そのすぐ近くの地図上だけは「一等地」にある。現在人口七十二万の政令都市。そもそも相模原市は陸軍の軍都で、造兵廠や士官学校、病院などを中心にして、昭和十二年に都市計画が行われたと聞く。私の生まれた年である。おそらく、何もないところに、図面を引いたのであるか、市役所前通りは道路幅が四十メートル、その周辺を巡る大路は二十五メートル巾、我が家の前の中路も十二メートルあり、横の小路でさえ六メートル巾で、隅切りもしっかりしている。都内の銀座通りや第二京浜が二十五メートル巾、小路が三〜四メートル巾であるのと比較して、かなり贅沢に計画されている。もつとも、市役所前通りは、飛行機の発着ができるように造られたと言う。

もう二十年近く、健康のために家の周りを毎日一万五千歩以上近く歩き廻っている。したがって、市役所を中心として約十キロメートルの範囲の規制緩和やその結果による栄枯盛衰を体験的に知っている。

近くを通る十六号線は、市役所近くだけ四十メートル幅で、昔からファミレスの激戦地。数えて見ると、橋本駅から古淵駅までの九キロメートル内に約五十軒あり、その多くが二十台以上の駐車場を備えている。百八十メートルに一軒の割合である。ほぼ、名の通ったチェーン店やフランチャイズ店はある。

十六号線に出店して営業できたら、全国展開をするのだという。観察していると、場所によっては、何をやっても流行らず、数年で店種が替わるところがある。素人でも結構良く判るものだ。

最近の大きな変化は超高層ビルの建設ラッシュである。東京都心ならいざ知らず、相模原市に十八階建て以上のビルだけでも二十一棟も出来たのである。小泉純一郎の規制緩和の効果であるが、今もその流れは止まらない。

その結果、何が起きたか。JR横浜線の駅近くから十六号線に囲まれた便利なところと相模原の郊外の格差拡大である。高度成長期に争って買い求めたサラリーマンの住宅地は、

概して相模原の「田舎」にある。それでも一戸建てに入居でき、土地の値上がりもあって、幸せを享受していた。それに続いたのが、相続税対策で急速に広まった民間アパート建設ブームである。いずれも主として郊外に建てられた。

しかし駅近くには、便利な高層マンション等ができる始めると、郊外の民間アパートは、次々に空室化する。便利な駅近辺の方がむしろ安価なためである。だからと言って、民間アパート側が新規入居者の家賃だけを下げ対抗する訳には行かない。

相模原市の発展を支えた工場群が地方の新工場に移転し人口も流出している。空地化した工場跡には、超高層ビルや大型住宅団地が開発され、便利な区域に良質な住居が安価に供給されている。そのため、かつての一戸建て地域は、徐々に「過疎化」して行く。

地価は二十五年前に比べて三分の一以下まで下がった。最近やっと、駅周辺は値上がりに転じたが、郊外はまだ値下がりが続いている。無秩序に開発された「田舎」が再び「田舎」に回帰しているのである。

青山学院大学の例が象徴的である。一九八二年に厚木市の研究学園都市「森の里」の誘致で厚木キャンパスを造ったが、二〇〇三年

には、新日鉄研究所の跡に相模原キャンパスを作り移転、更には二〇一三年には都心の青山キャンパスに高層校舎をつくって、相模原からも主力を引き上げている。新宿から一時間半もかかる田舎の厚木キャンパスは、おしやれな気風の青山学院の学生には全く不人気であった。

そもそも規制緩和とは既得権の破壊である。理髪店は強固な組合組織によって、三千五百円の料金を守っていたが、今や千円カットの時代である。相模原市内には、借金してやっと構えたと思われる住居付き理髪店が数多くあるが、あまり客の入っているのを見かけない。その結果であろうか、我が行きつけの千五百円カットのお店にも腕の良い職人がいる。

酒屋さんもその典型例である。酒類の量販安売り店が続々誕生すると、やって行けなくなった酒屋さんは次々にコンビニに変身する。店舗用地もあり酒の販売もできたから、当初は順調であった。しかし、道路脇に駐車が出来ない小規模コンビニからつぶれ始める。

替わって五〜十台の駐車場を持つ中規模のコンビニが一気に広まったが、現在では店舗の大きさは五十坪止まりであるが、駐車場が三百〜五百坪というのが相模原のコンビニの

標準である。小さなコンビニが一掃され、中規模のコンビニがばたばたつぶれている中で、大型コンビニの出店競争は熾烈である。

先日も大型コンビニが開店したばかりだというのに、その百メートル先に大型コンビニの工事が始まった。建物はプレハブ状で、あつという間に出来上がったが、駐車場の工事と出入り口の公歩道の工事に手間取っていた。やつと完成しそうになってから、工事の進展に異常がある。突貫工事の様子が見られなくなったのである。どうやら、予定していたコンビニに逃げられたしまったらしく、開店を前にして早くもつぶれてしまった。

このようなコンビニ出店競争は、超大型スーパーの乱立と共に、相模原から小売店を完全に一掃してしまった。旧町村の個人商店街は大部分シャッターを下ろしたままで、何とか営業しているのは食物屋さんだけである。

我が家から五百メートル以内にセブンイレブンが四店、その他を含めると八店のコンビニがある。いずれも歩いて行ける所にあるが、かならず立派な駐車場を持っている。相模原ではコンビニとは歩いて行くところではないらしい。どうせ車で行くなら距離など関係ない。だから集客能力は駐車場の便利さと台数できまる。もちろん超大型スーパーは、駐車

場を千〜三千台持っている。車購入のメリツトを最大限享受するのが買物なのであろう。規制緩和とは、一面では既得権の破壊であり、いわば革新である。世代交代の速度と見合った規制緩和は救いがあるが、ミスマッチとなると理髪店や酒屋の悲劇となる。その点では東京都心は、大型店舗の用地難のため変化が穏やかで、工夫次第で地元商店街もやって行ける。

昔、革新を担ったのは社会党であった。しかし、真つ先に保守化したのが社会党である。総評、日教組などの組合活動が既得権化し、国会議員を幹部間で継承するようになると、若い血が入らず次々に高齢化して行く。

それに対して、保守党は選挙地盤を親子間で継承するため、世代交代が順調であった。そのため保守党が規制緩和などの革新を担い、革新党が変化に抵抗する保守派となってしまう。小泉純一郎は、自民党をぶっ壊すと言って規制改革をした。

世界的に見ても、共産党政権は全て、独裁化して変化に対応できず没落している。未だ共産主義の旗印を掲げている中国は、資本主義国以上に大富豪を生み、北朝鮮は古代専制国家的な金王朝となってしまう。

五月例会の報告

幹事より次の三点の提案があり、了承された。

① 例会開催日の変更

今年の九月の例会から、毎月第3土曜日の午前10時～12時とする。開

催場所は従来通りの千代田区立日比谷図書館四階セミナールーム

② 今年度の講演・執筆予定

会員の異動等に伴い、下表のように変更する。自由執筆は、友の会会員にも積極的に参加して頂く。

③ 忘年会の開催場所

今年は趣向を変えて帝国ホテル至近の「銀座コリドー店」のカラオケボックスで開催する。

平成27年度の修正計画表

敬称略

講演		自由執筆				
月日	担当	No	締切日	担当		
1月28日	新井 宏	1月 238号	12月末	(滝澤)	鍋屋	高橋
2月25日	漆原直子	2月 239号	1月末	(太田)	森下	佐藤
3月24日	大田精一	3月 240号	2月末	村上	漆原	諸橋
4月22日	村上邦治	4月 241号	3月末	平山	隆	藤田
5月27日	中込勝則	5月 242号	4月末	三戸岡	中込	安田
6月24日	三戸岡道夫	6月 243号	5月末	千坂	新井	柴田
7月22日	前田氏	7月 244号	6月末	滝澤	宇野	高橋
(外部講師) 白山信仰について						
8月	休会	休刊				
9月19日	隆 恵	9月 245号	8月末	太田	森下	佐藤
10月17日	森下征二	10月 246号	9月末	村上	漆原	諸橋
11月21日	(討論会)	11月 247号	10月末	平山	隆	藤田
12月9日	(忘年会)	12月 248号	11月末	(今年感動した本)		
1月16日	柴田弘武	1月 249号	12月末	三戸岡	中込	安田

編集担当からのお願い

原稿の締め切り日は原則として、月末としています。ただし運用上、「電子入稿」の場合は翌月一日まで入稿を待ちますが、それ以降の入稿は、翌月号にまわしますので、ご承知置き下さい。

もし、一日～二日程度の遅れが予想される場合は、予定の文字数または行数を事前にお知らせ下さい。極力、偶数ページに仕上げるため、原稿の追加や取捨選択を行う場合があり、他の執筆者に影響がでる可能性があるからです。

現在は、原則として、締切の翌月三日までに編集を終了し、幹事宛に提出しています。